宝塚市自立支援協議会　専門部会「けんり・くらし部会（地域移行グループ）」
令和元年度活動経過報告

Ⅰ　開催日時　第１回　令和元年７月４日（木）出席者 14 名　　13：30～15：30

Ⅱ　要旨

第１回　けんり・くらし部会（地域移行Ｇｒ）（令和元年７月４日）

1. 新常任委員紹介
　別紙参照

2. 平成 30 年度宝塚市自立支援協議会 全体会（平成 31 年３月 22 日）の報告
　「平成 30 年度宝塚市自立支援協議会　専門部会活動結果報告書」を基に障害福祉課より報告。

3. 昨年度の振り返りと今年度の取り組みについて
部会長）地域移行が進んでいない状況に対し、何とか進めていくことができないかいう思いから立ち上がった部会。地域移行に関する課題の検討や、身体障碍の方から実際に地域移行した体験談を聞き取るなど、地域移行のイメージ作りを繰り返し行ってきた。そして、実際に病院や施設に入院・入所しているどれだけの当事者や家族が地域移行したいと思っているかを把握するため、アンケート調査も行った。しかし、地域移行をしたいという声は２名しか挙がらなかった。特に精神科病院においては任意入院であれば退院できるはずなのに、どうして退院しないのかという疑問が挙がり、追跡調査も行った。協議を進める中で、任意入院に対する病院の取り組みが不十分かもしれないという仮説が立ち、実際に病院に話を聞いてみることとなった。しかし、病院に話を聞く前に、受け皿となる地域の体制はどうなっているのか、という声も挙がったため、地域の受け皿としての状況を確認するとともに、福祉サービスである地域移行支援事業の制度について障害福祉課の職員より説明を受け、理解を深めた所で、活用状況や課題を確認してきた。その中で、他市で具体的に地域移行支援を展開している相談支援事業所の職員を部会に招き、地域移行の実践について話を聞いた。その振り返りを行う中で、ピアサポーター(以下ピア)とのつながりが大切であることを確認したが、実際に宝塚市ではピアは上手く活用されているのか、活用するためにはどうしたらいいのかを考える必要性が挙がってきた。そして、実際に病院と相談支援事業所との連携体制の現状という課題も確認され、顔の見える関係を築いていく必要性について認識した。
事務局）昨年度の取り組みから見えてきた課題と、それに対する取り組み案について別紙資料を基に説明。
部会長）昨年度のまとめと今年度の取り組みについて、委員の皆様から意見をいただきたい。
Ａ委員）地域移行支援を考えていくにあたり、やはり一事業所では難しいと感じる。市内にもさまざまな施設・事業所がある。これらが連携していくことが大切だと考える。早急に基幹型相談支援センターを軸に市も考えていかなくてはならないのではないか。
事務局）基幹支援センターが宝塚市に無い中で、無いからとただ待つだけでなく、実際にどのように動くのかと、相談支援事業所が手を取り合って取り組んでいく方法を考えたい。
Ａ委員）市にも予算が無いと聞く。予算が無いなら知恵を持ち寄るしかない。それが協議会の役割でもあると思う。今のうちに何ができるのか、それを協議会で考えることもできるのではないか。先日、箕面市の基幹相談を見学したが、箕面市には 11 の相談支援事業所と 50 のグループホームがある。市によるこの資源の違いは何なのか考える必要があるだろう。それを考えるために自立支援協議会がある。
Ｂ委員）２ 年前は地域医療Ｇｒ（現：地域生活Ｇｒ）の委員を務めていた。久しぶりに部会に参加することとなり、精神のことがここまで取り上げられていると知り、とてもありがたく思っている。ただ、やはり予算が無ければ動きが取れないとも感じる。長期入院患者のことが取り上げられるが、長期の方だけでなく、短期間の方にも事業所やピアが訪問するなどできればと思う。息子が入院している病院に毎週会いに行っているが、相談支援事業所の職員を毎週見かける。病院の方とも懇意にされているのだろう。短期でもピアの方と関わることができればと思うが、息子が入院している病院では、ピアの受け入れ態勢は病棟によると言われた。
Ｃ委員）ピアは病院が受け入れてくれることが一番。ピアサポーター一人では病院に入れず、専門職が一緒でなければならない等、病院ごとに決まりがある。また、それぞれの病院でその決まりごとや受け入れ態勢は違う。このルールをクリアして初めて病院に入ることができる。宝塚の場合、地域移行が進まない要因の一つと

して、他市にしか精神科病院がないために地域移行に結び付けられないことも考えられる。何かをするときは先頭に立って動いてくれる人がいれば変わるだろう。
D委員）他市であれば、どの事業所にピアがいると周知が図られている。西宮であれば「輪っふる」、三田は「あすなろ」、尼崎は「あすなろ福祉会（ポルタ）」と、病院も施設も当事者も皆が知っている。当事業所に見学にこられる際も、三田であればあすなろの職員がピアと一緒に見学に来る。ただ、宝塚はどこにピアの方がいるのか、どんな活動をされているのか分からない。まずは知っていくことから始まるのではないか。
事務局）ピアについて、5 月末に自立生活支援センターに行って話を伺ってきた。宝塚市では自立生活支援センターが市の委託を受けてピアサポーター活動を行っている。登録されているピアの方は複数おり、高次脳機能障害、脳性まひなどの当事者の方から、その保護者・家族の方まで様々であった。ピアカウンセリングや、居場所や交流が目的のサロンなどの実施、外部研修にて講演もされている。地域移行の活動として、ピアからも何か取り組んでいきたい、病院に行きたいとの声は挙がるが、一機関からの声掛けだけでは病院に入っていくことができないという門戸の狭さが話に挙がった。宝塚に関しては、自立生活支援センターがピアサポーター活動の中心となっているが、これからの活動の展開についてはピアの方たちと話をしながら、どのような活動ができるかを考えている、とのことであった。
Ｂ委員）家族会では、月に 1 回食事会「ほっこり会」を行っている。2 年程続いており、メンバーや元メンバー等、みんなで一緒に食事を取りながらほっこりしてもらおうという意図の集まりである。その場にはピアサポーターの方も来てくださっており、Ｃ委員も来てくださっている。
部会長）私自身もピアサポーターのことは詳しくないが、どんな時にピアサポーターに来てもらえるのか。成年後見で関わっている方でピアサポーターの方に自宅まで来てもらって話をしてもらうことは可能なのだろうか。ピアの方が入れるのは病院だけなのか、それとも在宅の場も可能なのか。ピアサポーターになるためにはどのようにすればいいのか。他の地域であればピアサポーターといえばここ、という機関があるのに、宝塚ではそのような場所がないのはなぜなのか。色々な疑問がある。やはりピアのことを知っていくということも大切かもしれない。自立生活支援センターや他の所でも構わないので話を聞いてみてもよいと思う。
Ａ委員）どの機関とも、誰ともつながっていない人が一番に相談する場所や情報を得る場所はどこになるのか。やはり障害福祉課か。
障害福祉課）市の福祉計画を作成する際のアンケートにて、主な相談先はどこかという質問項目を設けた。平均して多いのは障害福祉課。ただ、障碍種別により差はある。精神の方だと、「相談先がない」と答えた方が 12.7％と多い傾向にある。精神の当事者の方は相談先がないと感じていることがここからも見て取れる。
Ｂ委員）昔は、精神の方は相談先として保健所を挙げる方が多かったが、今はそうではない。最近は保健所を思いつかない方が増えた。以前と比して保健所が離れたイメージもあり、寂しさを感じる。
Ｅ委員）障害福祉課の窓口で手帳や自立支援医療の手続きに来られる際、それ以外のことについても相談される方も多い。生活や福祉の相談となれば、相談支援事業所につなぐようにしている。保健所は保健というイメージ。家族会のことも伝えるが、病院でケースワーカー（以下ワーカー）がいる所であればそこから相談につながっていくこともあるが、宝塚市内にはワーカーがいる病院が少ない。医師だけであれば生活面までの相談となると難しくなる。精神科の診療所にワーカーがいて欲しいと個人的には思う。
Ｄ委員）昔は保健所でデイケアを行っていた。保健所の窓口としても開かれていてつながりやすかったのではないか。西宮市や尼崎市は行政手続きの違いがあり、保健所への繋がりやすさなどの差があるのではないか。
Ｆ委員）以前は主な相談先が保健所だった。今は相談窓口が増えたために却って分かりにくくなったということもあるかもしれない。
部会長）「どこに相談していいか分からない」ということについて掘り下げたい。本当にどこに相談していいのか分からなかったのか、相談はしたがつながらなかったのかで、意味合いが違ってくると感じる。どこに相談していいのか分からないのであれば、案内をすればいい。上手くつながらなかった、対応してもらえなかったということであれば大変だろう。いずれにしても、元から出ているピアサポーターの話はしていきたいと思うが、皆様の意見としてはどうか。共通認識を一つ持つことも大切だと感じるが。宝塚の現状も含めて知ることができれば。
Ｄ委員）何かにつけて助成がいるのではと考える。誰かが先頭に立って動いていくにしても、誰かが動いていかなければ始まらない現状が今まで続いていた。みんなでやっていこうというやり方が宝塚に合っていると思う。情報を仕入れていく中で、みんなでやっていく方法で進めていくことができればと思う。
事務局）先日保健所と話をする中で、どうすればうまく病院と繋がって話ができるか、みんなで考えて進めて

いくことができれば、実践者レベルで話ができれば、という話になった。
Ｆ委員）相談支援の方がどれだけ地域移行のことを知っているかも様々だろう。計画相談としては精神科病院に入っていっていると思うが、地域移行となればどのように進めていけばいいのか分からないというところもある。分かれば取り組んでいきたいと考えている事業所もあるのかもしれない。今後、健康福祉事務所では、相談支援事業所の方と集まって、理解を深める機会が持てないかと考えている。まだ具体化はしていないが、一度集まる予定はある。
部会長）市民福祉金廃止に伴う基金の活用の話もあり、市が委託する相談支援事業所が増えたが、特定の所だけではなく、みんなで取り組もうというイメージが持てればと思う。相談支援事業所と病院の取り組みとして考えていく中で、協議会としてどこまでのことができるだろうか、とは考える。
D 委員）協議会の地域移行グループで実践・実務として取り組むことは難しい。地域移行グループの派生としてＦ委員の言っていた集まりが最初の突破口になると思う。この集まりの会が何かを具体的に動かしていくグループになれば、実践レベルで動いていくのではないか。その立ち上がりの最初の部分を保健所に担っていただき、その動きをサポートしていくのが協議会であり地域移行グループではないか。自立支援協議会の名で病院に働きかけるのは難しいと感じる。
A 委員）共通認識を持って一緒に集まって行くのが最初になる。
D 委員）集めていただいたグループ、そしてこの地域移行グループが協力体制をとることや、集めていただいたグループで出た課題をまた地域移行グループに持ち寄り、そして解決に持っていけないか協議し、そして結果を市に吸い上げてもらうという流れもできればと思う。
A 委員）話し合いをするばかりで終わるのではなく、困りごとを考えていくのが協議会だろう。
部会長）実際にピアの方が入院されている方に会いに行く段取りはどのようになっているのか。患者側が来てほしいと言えば行くことが可能なのか。
C 委員）あすなろでは、精神科病院で行っている作業療法(以下 OT)の前に訪問している。クッキーを持参し、病院で飲み物を用意していただき、４つくらいのグループに分かれる。ピアから自己紹介をして始まり、「何か困ったことはないか」等と話しかける。「来月退院です」、「先月入院した」、というような話をしながら過ごす。4～5 人のピアサポーターと支援者、介護福祉士と一緒に安定した患者さんと話をさせてもらっている。とても喜んでもらっていて、看護師からも「この人はこんなに話ができる人なのか」などといつもと違う一面が見ることができ、感謝しているという話もいただく。
部会長）どのような形で会うかは病院ごとに違うのか。
C 委員）そのとおり。病院によって違う。
部会長）今の一例は OT の前に、OT に参加するために来ている人と会う。呼ばれたから行く、個人的に行くというわけではない。
C 委員）「この日にあすなろが来るから参加したい人」、と参加を募ってもらっている。そのため事前に人数の把握はできている。
B 委員）OT プログラムのひとつとして参加するのか。
C 委員）病院がそこまで考えてくれているかはわからないが、1 時間ほどはいただいている。
D 委員）おそらく、あすなろも輪っふると同じで、具体的なケースがなくても病棟に入ることのできる許可を病院に得ている。その後に OT プログラムを使ってこのようなプログラムができないかと交渉し、そのような形になっているのではないか。話の持っていき方は輪っふると同じ。宝塚で同じような取り組みを行うとなった時、どこか特定の相談支援事業所でやる、という話には恐らくならないため、グループを作って病院に提案する。実務で動く段階になったら、マンパワー不足はどこにでもあるため、自立生活支援センターのピアの方や、宝塚市内の相談支援事業所が協力して当番制や持ち寄りで行うことは可能ではないか。このような下準備を行い、ピアサポーターや相談支援員が病棟内に入っていくことで、「この人とだったら退院に向けて動いてみようか」と思える患者が増えていき、やっと地域移行の実績が増えていくのではないかと考える。
E 委員）ピアサポーターが動く時、個々人のケースとして地域移行支援事業として動くものと、団体として関わりを持ち入っていくものと大きく分けることができると思う。団体として入っていくという下地があった方が、地域移行支援事業につながりやすいと感じる。
D 委員）私のように地域の福祉サービス事業所としては病院に入りやすいが、宝塚市の委託を受けた相談支援事業所としては入りにくいところもあると思う。市にそのような動きを認めてもらえれば、出来ることも増えてくるのではないだろうか。

事務局）ピアサポーター事業の話を聞きにいった時にも、今後は色々と考えながら動いていきたいと話があった。どのように今後連携していくのかという話し合いは必要になると感じている。
部会長）入院している人は、宝塚の人、三田の人、西宮の人等と分かれているわけではない。分け隔てなく取り組めるに越したことはないが、自立支援協議会として、市の活用として考えていくこととなる。ピアサポーターについて学びつつ、仕組みづくりについても情報を確認し、部会と共有しながら取り組むことができればと考える。
今年度はピアサポーターについて学びつつ、仕組みづくりのグループの動きを確認しながら進めていくこととする。今年度で何かを提案するところまで話を進めていくことができればと思うが、次年度以降となってもよいと考える。
事務局）ピアサポーターの実践について、今後は伊丹市の ICCC 等に話を聞きたいと考えている。次回の部会までに他市の状況を確認し、その報告を行いたい。また、以前の輪っふるの時のように実践を聞かせていただく場を持つこともよいかと考えている。

4.精神科病院見学会の報告
事務局より報告
4 月 25 日に実施。午前・午後の 2 部制で、それぞれ 1 時間半実施した。市内の相談支援事業所３か所から計６名が参加した。
見学会の目的は 3 つ。①精神科病院に入院されている方が、どのような場所でどのように過ごしているのかを知る。②病棟職員との顔つなぎの機会を作り、今後、地域と病院が連携し退院支援や地域移行支援等を円滑に行えるようなきっかけを作る。③病院での過ごし方等を知ることで、長期にわたり入院している方が、退院して地域での生活に戻るために、どのような支援が必要となるのか見識や、ご本人の気持ちに寄り添った支援につながるような研修の機会とする。
見学会は 1 部 2 部ともに内容は同じもの。病院の概要や変遷等を聞き、その後病棟内の見学を行った。病棟内を包み隠さず見学させていただくことができ、古くからある東病棟も見せていただいた。大部屋に大勢の方が入院されている姿は、2～3 年前からようやくプライバシーや人権に対する配慮がなされてきたと言えども、決して行き届いているとは言えない現状を目の当たりにした。見学を終えた相談支援員からの感想の中にも、「衝撃を受けた」「ショッキングだった」というものもあった。隔離室で何日も過ごす、入院して何十年と過ごすということを考えた場合、「もし自分がその立場であったら」と立ち返って考えるきっかけにもなったと感じる。
相談員は今までも退院支援においては病院に行っており、待合室や面談室には入っていた。今回病棟内に入ったことで、治療の場であるため仕方がない面もあるが、監視カメラがある、カーテンはあるが開け放たれている等、普段の病院の姿を見ることとなり、「何と言えばいいのか分からない」、という声も感想として挙がっていた。本来病院は治療を行い、快復すれば退院するところである。退院への働きかけや声の挙がる仕組みづくりの必要性を改めて認識することとなった。現在の相談支援業務の中では、退院支援の中で A さんという個人に会うことができても、その他大勢の方には会うことができない。働きかけができる仕組み、病院に入っていくことのできる仕組みを作っていくことで、退院することができる、当たり前に地域で暮らしていける環境を整えていくことができる、この仕組みづくりの必要性を感じていただけたのではないかと思う。実際、見学会終了後に何かできることがあるなら協力させていただきたいという声も挙がった。
見学会を開催し、病院からも良い機会となった、また開催出来ればとの声も挙がっていると聞いている。今回は病院がどのような所であるのかを相談員が見学に伺ったが、病院側からもどういう場所で相談支援が行われているのか見てみたいという声も挙がっていたと聞いている。

質疑
A 委員）参加は 3 事業所だけだったのか？
⇒急なケース対応等があり、当初予定していた２事業所が参加できなかった。
D 委員）相談支援事業所だけに限定した理由はあるのか？
⇒地域移行を進めていくにあたり、実際に携わる相談支援事業所の意識づくりをしたかったため。
また、実際に入院されている様子を目の当たりにすることで感じられることが多くあると思ったため。

B 委員）息子の転院の時に 5 か所ほどの病院に行ったが、病院は個々に特色がある。一長一短と言ってしまえばそれまでだが、本当に様々である。
⇒包み隠さず見てほしいという思いが病院側にもあり、今回はそれを実現できた。病院側も相談支援事業所と関係を作っていきたいと言ってくれた。

B 委員）以前関わった病院の PSW（相談員）の方は対応が最高に良かった。「どんなことでもお受けしますよ」と、ぼろぼろになった心を支えてもらった。

G 委員）見学会の件とは異なってしまうが。最近関わった話として、精神の当事者で認知症の入っている人がいる。犬を飼っているが、リードを外しているためにその犬が逃げ出してしまう。その犬を迎えに一緒に警察に何度も行った。通学路にもなっているため、犬が子どもに噛みつかないよう見守りもしてきた。地域移行の考えでは「地域で見守っていきましょう」とあるが、地域住民として、どこまでのことができるのかと感じる。地域包括支援センターや障害福祉課にも相談した。保健所や警察にもたびたび来ていただいている。事業所はたくさんあるが、市から委託を受けているところはもっと事業を広げていくことや市と連携して動いていくことができるのではないかと思う。ピアサポーターの活用促進等、更に活発にできるのではないか。高齢の分野であれば地域包括支援センター７か所が市から委託を受けている。地域で何か困ったことがあれば地域包括支援センターに連絡をする。
地域でも「見守りとはなにか」と思案しつつ苦労している。民生委員として地域の目に見えないような活動もしている。

D 委員）私は仕事として施設に迎え入れている。地域で問題を起こして入院しても、退院して地域に戻ってくると、地域の方からするとまた負担になり得ることが起こる可能性はある。そこは私たちも考えなければならない部分であると改めて感じた。

5.その他
事務局より
今年度のスケジュール
地域移行の実践に向けた動きについては、次回の部会までに事務局が主となり情報収集を行う。委員からの話にもあった集まりを９月頃に開催予定。これらの報告を第２回の部会（12 月予定）で行う予定とする。来年２月ごろに第３回の部会を考えるが、委員からの意見を吸い上げ、開催時期や回数も検討していくこととする。

障害福祉課より
１回目の定例会が 10 月 8 日、全体会が 11 月 5 日に開催予定となっている。
宝塚市における地域生活支援拠点について現在市と委託相談支援事業所で検討を行っており、11 月の全体会で大枠の構想を発表する予定となっている。

Ⅲ. 今後の展開
精神科病院からの地域移行に関わる議論を重ねる中で、「なぜ宝塚市において地域移行支援事業が活用されないのか」という課題が浮かび上がり、近年はその理由を糺すための協議を重ねてきた。
今年度は、昨年度の協議でまとめた３つの課題に対する取り組み案(別紙参照)について、相談支援事業所が核となり取り組みを開始した。病院との連携及び働きかけや、近隣市での地域移行の取り組み、ピアサポーターとの協働等をテーマに、実践についての聞き取りや病院への見学を行っている。これらの取り組みを部会内で共有し、今後の方向性の確認や、新たな課題が生じた際には委員に諮りながら取り組みを継続していきたいと考えている。また、昨年度から継続のキーワードとしての「ピアサポーター」についても、部会内において実践の話を伺うべく、調整を行う予定である。

令和元年度　第１回　宝塚市自立支援協議会　定例会及び全体会
けんり・くらし部会（地域移行Gr）　資料

昨年度の取り組みまとめ

◎昨年度の協議を通じ、宝塚市における地域移行支援事業の推進に関する課題の整理と今後の取り組み案について下記のようにまとめた

課題①

部会で取り組んだアンケート(平成27年)より、長期に入院している方から退院希望に向けての声が上がらない現状があること。また、地域移行支援事業という制度があっても、本人が申請をしなければ利用できず、制度の周知が十分でないことも考えられる。

また、長期入院患者の退院意欲向上を図る為には、病院内外からの刺激が必要であり、病院も外部からの働きかけを求めている一方、支援機関単体で病院への働きかけを行うには限界があり、相談支援事業所や、市を含めた行政機関や地域の受け皿となる支援機関との連携が重要となる。

課題①に対する取り組み案

病院との連携を取りやすくするための仕組みの構築が必要と考えられる。実際に支援にあたる支援機関や行政等が、どのような役割を担っていけるのかを協議する必要があり、部会という大きな集まりではなく、実践者レベルの話し合いの場で整理を行う。

課題②

地域移行支援事業の実施主体でもある相談支援事業所と精神科病院との関係性の希薄さがあるのではないか。長期にならない退院支援についての相談はあるが、長期に入院している方の地域移行に関しての相談は少ない現状がある。

課題②に対する取り組み案

病院と相談支援事業所との関係性を強める取り組みも必要である。

まずは、市内特定相談支援事業所を対象とした精神科病院見学会の開催を企画し、近隣の精神科病院から、関係づくりの取り組みを進めていく。

また、相談支援事業所間の連携強化も図り、地域移行支援を実践する側の意識強化も目指す。

課題③

地域移行支援を進めていくにあたり、ピアサポーターの存在は大きく、ピアサポーターだからこそできる関わり(入院患者への刺激、共感、地域生活への意欲の向上等)がある。しかし、宝塚市におけるピアサポーターの活動状況については分からない部分が多くあるとの意見が聞かれる。

課題③に対する取り組み案

宝塚市のピアサポーターの活動状況について知る必要がある。

宝塚市におけるピアサポーターの現状確認及び今後の連携の可能性について確認する。